平成７年10月24日第３種郵便物認可　２０１２年５月10日発行（毎月１回10日発行）・通巻２６４号

[月刊]
En-ichi 圓一
2012
5
no.264

魂の教育を実践する

インタビュー
家庭の中に「聖・美・愛」の価値を実現しよう

社団法人スコーレ家庭教育振興協会会長 永池榮吉

日本の家庭を守る教育情報誌

Contents

(かつて日本では)子供たちは日々親が見せていた自己犠牲の愛への感動を心の糧にして成長したわけです。自己犠牲は人間の最も美しい姿ですね。…私は、豊かな時代においても、家庭の中に「聖なる空間」を持つべきだと思います。それは例えば、「共感の愛」です。

家庭の中に「聖・美・愛」の価値を実現しよう　永池榮吉…5

今月の焦点

ゆがんだ「仲間文化」(ピア・カルチャー)ごと変えていこうという観点でいじめ問題に対応しようとしている…学校をあげての人格教育プログラム実施と地域社会への奉仕などからなる十の方策とプロジェクトだ。

いじめ撲滅に取り組む人格教育プロジェクト-米国…11

思春期というのは今までの自分をいったん解体し、再編していく時です。…その中で、連続性が失われるという体験から、実は大切な問いが生まれていることが分かります。かなり深く「自分とは何だろうか」と考えさせられます。

「中一ギャップ」をどう防ぐか　庄井良信…15

3 巻頭言
魂への配慮としての哲学を　長崎大学名誉教授 篠原駿一郎

4 教育再生への課題と展望
「新しい家庭像」を提案する
家庭の中に「聖・美・愛」の価値を実現しよう　(社)スコーレ家庭教育振興協会会長 永池榮吉

10 ワールドアフェアーズ
いじめ撲滅に取り組む人格教育プロジェクト—米国

12 情報ファイル
小学校教員の38.5%が50代以上
日本の高校生「留学したい」は4カ国中最低

14 私の教育実践
「中一ギャップ」をどう防ぐか—臨床教育学の視点から　北海道教育大学教授 庄井良信

17 子育ては絵本で大丈夫
「しあわせなぶた」ほんとうの幸せってなんだろう？　劇団天童／天童芸術学校代表 浜島代志子

18 病を克服した偉人たち
滝沢馬琴 失明しても書き続けた大作『八犬伝』

20 教育情報
千葉で人格教育協議会結成大会 ほか

22 Book Review

24 歴史と伝統の探訪
沖縄学の父、日琉同祖論唱える／沖縄

巻頭言

長崎大学名誉教授
篠原駿一郎

魂への配慮としての哲学を

「魂」とは何でしょうか。今の時代、私たちの多くは魂などというものの存在を信じてはいません。私たちが信じているのは、この身体とそれに宿る精神のみです。したがって、この世の命が尽きれば全ては終わりです。これは日本も含めて産業化された国の人々の大きなイデオロギー、つまりは証明も反証もできないような思い込みです。

このような社会が依って立つ理念は、個人主義、平等主義、自由主義、資本主義、といったものでしょうか。そこには、現世における私たちの欲望を精一杯満たすことこそ「生きる目的」あるいは「生きる意味」である、ということが含意されているようです。これらの理念は、明治以後に私たちが西欧から学び、その後、国家主義的政治体制による抑圧などの挫折がありましたが、先の敗戦以降は、再びこれらの理念に基づく市民社会を理想としてきたし、これからもそうである、と言えるでしょう。

しかしながら、この現世主義的な理念には、私たちの存在を超えた存在者、大自然、といったものへの崇敬の視点が欠けているようです。そこでもし、私たち自身の存在をこの超越的存在者との関係で考えるならば、やはり、私たちの存在の核としての魂のようなものを想定すべきでしょう。

単に身体と精神の合体した現世的な人間ではなく、そこに魂を有するものとして人間存在を考えれば、私たちの世界観や人間観、そして人生観も大きく変わるでしょう。そして魂そのものを鍛え陶冶するということ、それが魂へ配慮するということです。プラトンによって描かれたソクラテスは「人は身体や金銭のことよりは、魂ができるだけ優れたものになるように配慮すべきである」という趣旨のことを語っています。このことは、今なお、哲学の伝統として受け継がれている重要なテーマなのです。

大いなる大自然や超越者との関係にある魂は、永遠の相のもとにある存在です。それは単なる欲望充足のための主体とは違います。私達の人生の目標を定める視座は、欲望充足を超えたところに置かれなければなりません。それは、人生を現世だけに限定した刹那的価値観で考えることではなく、社会を単なる欲望調節のための機能として考えることではなく、地球を単なる人間だけのもの、あるいは私たちの世代だけのもの、として考えないという視座なのです。

現代は、一部には哲学復活の兆しも見えますし、それは現代社会の不安を反映しているのかもしれませんが、まだまだそれは実を伴うものにはなっておりません。「魂」という語を復活させ、その魂への最大限の配慮という視座を私たちの心にしっかりと据える、そのときにこそ、本当に哲学が復活したと言えるのではないでしょうか。

「新しい家庭像」を提案する―新・生命主義概論

家庭の中に「聖・美・愛」の価値を実現しよう

日本型個人主義の到達点が「無縁社会」ではないか。家庭の中に聖なるもの、美なるもの、愛なるものを実現して、家庭を再生させよう。

「日本型個人主義」の到達点

――「新しい家庭像」について提案しておられますが、それについてお聞かせ下さい。

日本の家庭は豊かになっていく時代の流れの中で、もろくなってしまったと言われます。その大きな要因は「日本型個人主義」にあると私は考えています。その特質は次のようなものです。

一つは、日本型個人主義は「神を持たない」ということです。欧米の個人主義が一神教のGod（神）を持っているのに対して、日本型個人主義は人間としての尊厳性を根源的に支える何ものも持っていません。いわば虚無主義です。戦後六十年を経て、その欠点がもたらす現象が起きているわけです。家庭のあり方、子育てのあり方の基礎となるものが何もない。これが現状です。

二つめは、家庭・家族の連帯を育むシステムを持たないということです。日本では敗戦後、教育勅語を廃止しましたが、それに代わる何らかの道徳的指針を定めることができませんでした。

欧米の一神教の倫理観に代わるものが、東アジアにおいては伝統的な家族道徳でした。にも関わら

永池榮吉
ながいけ・えいきち
社団法人
スコーレ家庭教育振興協会会長

1939年北海道生まれ。80年7月『国際スコーレ協会』を設立、99年8月『社団法人スコーレ家庭教育振興協会』会長に就任。2005年、教育学博士。文部科学省主催「全国生涯学習フェスティバル」に第1回から講師として参加、NHKテレビ「視点・論点」に出演するなど、多方面で活躍中。（公財）日本ユニセフ協会評議員・日本家庭教育学会顧問・国語問題協議会評議員など。著書に『こころの添木』『人生の難問を解決する魔法の言葉』『生き方の基本』『生きる強さを育てる家庭の底力』ほか多数。

「日本型個人主義」は家族の連携を育むシステムを持っていない

ず過去の歴史的経緯と国内のイデオロギー対立から、この問題の決着が先送りされてきました。結果として、家族の絆を育てる教育より、個人の自由や権利を強調する教育が主流となってしまい、世代を重ねるごとに「個族」への悲惨な道を歩むことになったわけです。

三つめに、歴史観がないということです。わが国の教育システムは久しく唯物史観の影響下にあり、魂の欠落した道徳教育があるのみでした。一般的に、郷土の偉人や土着の文化と結びついた教育がほとんど存在していませんでした。

それから四つめ。生きることが軽いと言わざるを得ません。例えば、欧米のように人間が神の子と位置づけられるのと異なり、わが国で人命の重さが強調されることはあっても、それが道徳意識を育てる土壌にはなっていません。神の愛に代わる親の愛、つまり子供を生み育てる親の愛の重み、苦労の重みこそ、人命の重みにつながっていくのですが、これに触れることはタブーとされてきました。戦後、自己の生を敬虔に意識するなんらの教育も存在せず、しかも恵まれた環境で軽く生きていくこともできる日本では、生きることの重みが子供へ体験的に教えられることがありませんでした。

こうした日本型個人主義の到達点が、近年問題視されている「無縁社会」に他なりません。

――「新・生命主義」というテーマで研究会を十五年間続けてこられたということですが、その中で「聖・美・愛」の価値観の必要性を述べておられます。この意味についてお願いします。

親の自己犠牲の愛を心の糧に成長

かつて日本がまだ貧しかった時代、多くの日本人の生活は楽ではありませんでした。それでも家庭では、母親が夫や子供たちに食事をさせ、自分は後回しにするという光景がよく見られました。

そのような家庭で育った子供たちは、日々親が見せていた自己犠牲の愛への感動を心の糧にして成長したわけです。自己犠牲は人間の最も美しい姿ですね。そう考えると、子供にとって親はこの世で最も神聖な存在です。

このように、日本の親たちはかつて無意識のうちに聖なるもの、美なるもの、愛なるものの価値を、家庭の中に実現していたのではないでしょうか。

豊かな時代においても家庭の中に「聖なる空間」を持つべき

考えてみると、冷戦後のテロの問題をはじめ、国際情勢や国内の社会風潮を見ると、何が真なのか、何をもって善とするのか、「真・善・美」の価値観が大きく揺らいでいます。

その中で、宗教は違っても、聖なるもの、美なるもの、愛なるものという視点から人類の普遍的な価値観を捉えることができるのではないかと考えるのです。

「共感の愛」と「敬う心」を

――親は、人類全体に通じる価値観を家庭の中で学び、代々受け継いでいたということですね。

そう思います。それが昭和三十年代以降の高度経済成長をきっかけに、自己を犠牲にする必要がなくなりました。その頃から、日本人が無意識のうちに大切にしていた価値観が消えていき、それと共に家庭が崩れ始めました。もちろんこのことが家庭崩壊の原因の全てとは言えませんが。

私は、豊かな時代においても、家庭の中に「聖なる空間」を持つべきだと思います。それは例えば、「共感の愛」です。子供のあるがままを受け入れ、その短所をなじるのではなく、その長所をほめてやり、子供が「辛い」と言えば「辛いよね」、「嬉しい」と言えば「よかったね」と応じるこの共感の愛が、親の愛を伝えることができる新しい人間的価値であると思います。

「子供の良いところをほめる」ということ、子供の良いところを見つけてメッセージとして伝えるということは、子供への愛と祝福の実践です。子供への愛を実践するということは、共感が根っこにあるわけです。

また、「敬う心」。人として敬虔な気持ちで頭を垂れるべき対象と頭を垂れる場を、家庭の中に持つべきです。そういう真摯さを持って親が生きていれば、子供はそれを感じ取ります。人間はなぜ尊いかと言えば、愛を与えられて育ったからです。自分の中には自分の父母の命が流れており、その父母にもそれぞれ父母がいました。その命の重みが受け継がれています。私は祖先から連綿と続く「生命史の継承者」である。自分の中にたくさんの命が流れて息づいている。今の自分は、父母を通じてはるか祖先に通じる命の豊かな営みの一端としてここにある。

親とは「造物主」の代行者の位置

このようなことを子供に伝えていくには、自分が自分の親を、生きていようが亡くなっていようが親を尊び、亡くなっているのであればその親の遺影に手を合わせるという生活習慣を持つことが重要だと思います。私は毎朝、神棚と仏壇に手を合わせるのが習慣です。それは父親がずっとやっていて、それを見て育ちましたから、自然と父のようにやりました。親の暮らしの姿は子供に大きな影響を与えます。それが宗教的体験まで高められる場合もあるでしょう。

親は子供を通じて祖先との縦の

子供は親を通じて神聖にして厳かな愛に触れて育つ

親は生まれた生命を育てるため自らの犠牲を厭わない性向を持つ

関係、社会との横の関係を認識することができ、さらにわが子への共感の心を育てることにより、家族愛を育むことができるのです。

また、子供にとって親とは、いわば「造物主」の代行者の位置にあります。それゆえ、親は生まれた生命を育てるため、自らの犠牲を厭わない性向を持っています。通常、子供は親を通じてこの世の神聖にして厳かな愛に触れつつ育てられます。こうして育てられた子供の、親に対するあるべき姿勢として、「孝」が説かれました。子供は親との関わりを通じて、この世の神聖なもの、美しい無心の愛に触れることができます。そうして得られた基本感情こそが、その人の人間性を形成することになります。

要は、現代における「聖・美・愛」を、日本の家庭は自覚的に実践する必要があるのではないかと考えています。

男女平等と父母の役割を説明できない

その場合、大切なのは家庭というものをどのように捉えるかということです。それは親の役割の問題ですね。

戦後日本の家庭の大問題は、男女の平等と父母の役割の問題を、理論的に説明できていないことです。それが各家庭に任されているということですね。ですから、ある家庭では「友達夫婦」として子育てをする。そうすると「友達親子」になるでしょう。まだ人生のことが分からない、体だけは成長した子供がとんでもないミスを犯す。そういう現象があちこちに見られるわけです。

ただ、昨年の東日本大震災は、家族の絆、地域の絆といった伝統が残っていたことを教えてくれました。今回の人々の行動を見ると、家庭再生の余地は残っていると感じます。

文明行き詰まりを打開する道は

――日本の家庭を形作ってきた原点は何だと考えられますか。

近代の文明は、神からの人間の解放ということでスタートし、人間中心の文明が今日まで続いてきました。

しかし今、それに対する疑問が広がっている。近代が現実には欲望の解放になっているわけです。やはり人間中心の文明から、宇宙もしくは生命中心の文明に転換していく必要があるのではないか。それが現代文明の行き詰まりを打開

神と自然と人間は全てつながっている。日本人はそのような感性を受け継いできた

する道ではないかという発想があるわけです。

　ではそれをどこに求めるかと言うと、くしくも日本の古神道に行き着いたのです。私は以前から日本を研究テーマにしてきたのですが、日本文明の中に生命を中心とした、あるいは宇宙を中心にした文明の手掛かりが残っていると考えたのです。

　神と自然と人間がつながっている。つまり森羅万象もつながっている。これは「コスミックライフシステム（宇宙生命共同体）」と言えるものです。これは思想というより感性ですね。古来、人は、神も、仏も、祖先も、人間も、動物も、全てつながった存在として受け止めてきました。理論的というより、感性として我々に受け継がれてきたわけです。日本人は昔からの自然性を無意識のうちに保ち続けてきた民族だと思うのです。自然の中に神を見出すという感性もそうです。

　――宗教で言えば汎神論というのでしょうか、様々な所に神を見出すということですね。

　私は古神道に行き着きましたが、本来は世界中にこのような思想があったわけです。

祖先に恥じないようにという考え

　――キリスト教の神の代わりに、祖先がいたというのが、日本の家庭だったのかなという気もします。

　今の若い人たちも、お正月には初詣に行きます。これは単なる風俗とは言い切れないと思うのです。

　実は、古代ギリシャの家庭が日本の家庭と多くの部分で重なります。かまどの神とかですね。汎神論的な信仰は、日本だけでなく世界にかつてはあったのです。

　昔は「天知る、地知る、人知る」という言葉がありました。ルース・ベネディクトが『菊と刀』で恥の文化について書いていますが、捉え方が非常に浅い。どうも純粋に文化人類学の視点で書いたと言い切れないところがあるわけです。

　確かに、かつての日本人には「世間様に恥ずかしい」という意識があったのは事実です。しかし、それだけではありません。やはり祖先に恥じないように、という考え方もありました。祖先とのつながりの中に自分を捉えるという意識は、日本人の中に残っていると思いますし、神を持たない以上は、やはり祖先。要するに親と子の関係ですね。その絆が祖先につながっていくわけですから。

母子を引き離した厚生省の失敗

　――児童虐待が深刻化している要因も、宗教の次元に近いはずの親子関係が希薄化しているということですね。

　昭和三十九年に、当時の厚生省がとんでもないミスを犯しました。日本の伝統的な子育ては「おんぶに抱っこに、おっぱい、添い寝」です。ところが母子手帳に「これはいけない」と書いたのです。「米国の母親はそういうことはしない。自立した子供を育てるには、添い寝

おんぶ、抱っこ…愛情のコミュニケーションの形を崩してはいけない

もおんぶもいけない。抱っこもいけない」ということを、全国の母親に送ったのです。これは米国帰りの学者が説いて、厚生省が取り入れたのです。

確かに米国の母親は、添い寝もおんぶもしません。しかし、彼女たちは常にキスをしますし、何度も「アイ・ラブ・ユー」と言います。それからハグ、抱き締めます。生活文化の形として、愛情のコミュニケーションの仕方を持っているわけです。日本人にはキスやハグの習慣はありません。「愛している」ともなかなか言いません。

つまり、日本的な愛情のコミュニケーションの形が、この時から崩れていったのです。この方針が変わるまで十年間かかりました。しかし、いくらこれが間違いだったと言っても、一度流れた情報を止めることはできません。

この時以来、日本には「寂しい子供」が増えました。そして打たれ弱い日本人ができています。国は時々、とんでもないでたらめをやりますね。

昔からの育児の知恵がある

三歳、五歳、七歳、七五三と言いますが、昔からの知恵に基づいた育児の節目があるわけです。それを、子供が生まれて間もない時から、親が働きに出る。現政府は社会が子供を育てると言いますが、子供は迷惑です。やはり親の愛情を十分に吸収して育つ場合とそうでない場合では大きな違いがある。

こうしたことを政治はどう考えているのか。結局、大衆迎合主義というのか、経済至上主義ですね。

いずれにしても、親子関係が非常に重要になりますね。これをしっかり形作っていくことで、社会も再生させることができると思います。E

日本人は偉大だ

いちばん心に響く！ 世界に誇る20人の生き方

杉原千畝　朝河貫一　織田楢次
望月カズ　野口英世　今西錦司
新渡戸稲造　鈴木大拙　新島襄
西岡京治　ラグーザ玉　ほか

学校でもちゃんと教えてほしい！日本の心

誇りと自信が湧いてくる！

増子岳寿 著　四六判／246頁　1680円

ご注文は書店へ、お急ぎの方は下記へ

コスモトゥーワン
tel.03-3988-3911 fax.03-3988-7062
http://www.cos21.com
〒171-0021 豊島区西池袋2-39-6-8F

ワールド・アフェアーズ

いじめ撲滅に取り組む人格教育プロジェクト —米国

日本と同様、いじめ行為が社会問題となっている米国。被害者の青少年が自殺する事件も相次いでおり、連邦政府も「反いじめ法」を策定するなどして事態の解決を図っている。一方、学校教育の現場では、人格教育を取り入れた抜本的な対策も講じられている。

ジャーナリスト・内田宏

年々深刻になるいじめ問題

今年三月、テキサス州コープス・クリスティで韓国・ヒスパニック系少年が自殺した。高校一年生だったテッド・モリナさんは、民族的マイノリティであり「混血」である故に、「ウルフ・パック」と称する非行グループから、いじめの標的にされ、毎日のように暴力行為を受けていた。結局、モリナさんは猟銃で自ら命を絶つ道を選んでしまった。

事件後、モリナさんの親族や支持者は、卑劣な人種差別者の行為に手をこまねいていた学校への抗議を兼ねて、学校前で追悼集会を実施した。ところが人種問題が絡んだ事件のためか、肉親に嫌がらせの電話が来たり、殺害予告の脅迫メールも送られるなど、卑劣ないじめ行為に命を落とした少年を追悼するどころか、きな臭い雰囲気が漂う集会になってしまった。

現在、米国でも学校内でのいじめ問題に苦しむ青少年は、全体の約三割にあたる千三百万人に上ると言われる。いじめの原因は、人種や性差、障害、宗教などだけでなく、日常の「ちょっとした違い」も含まれる。「多様性と統合」が信条と言うべきオバマ政権は、看過できない問題ととらえ、一昨年には「いじめ対策法」を打ち出すなど、「反いじめ」の一大キャンペーンを貼っているが、目に見える効果はまだ表れていない。

恐ろしいのは、いじめは被害を受けた子供の人格を著しく損ね、社会全体への憎しみを助長させることだ。いじめを受けた子供が、成人してから犯罪行為に関わる割合は六〇%とも言われる。学校に銃・ナイフを持ち込む学生も多くは、いじめを受けた経験を持つという。米シークレット・サービスの研究によると、銃乱射事件で、犯人のほとんどが子供の時に学校内でいじめにあっていたことが明らかになっている。

いじめと自殺の密接な関係

いじめ被害者の自殺も深刻だ。過去二十年間で減少傾向にあるものの、十歳から二十四歳までの青少年の死亡原因の第三位は自殺だ。年間四千四百人の若者が自ら命を断つ。また(自殺未遂とみられる)自傷行為で病院に搬送された青少年は年間約十五万人。〇九年度の調査によると、自殺未遂者の二〇%は何らかの形でいじめを受けていたことが分かっている。

さらに、フェイスブックやツイッ

ターなどウェブ上でのいじめも致命的だ。全米学校心理学者協会によると、バーチャルな形での攻撃は、直接的なものよりも精神的に与える打撃が大きいとされ、自殺を思い詰める子供は一般的ないじめ被害者の二倍近くに上ると言う。

全米学校心理学者協会危険回避・予防部会のメリッサ・リーブス部会長は米大手ニュースサイトMSNBCの取材を受け、米国のいじめ問題は「絶望的かつ有効な手立てが見いだせていない」状況にあると悲観的な見解を述べている。

事態打開のヒントは人格教育にあり

いじめが原因で自殺者が相次いだ一〇年。米連邦政府は「反いじめ法」を制定。さらに、州レベルでもニュージャージー州が一一年、いじめ行為が発覚した学校・学区に対して、徹底的な指導を求める法を施行。他州でも学校カウンセラーや心理学者主導の対処療法が試みられている。しかし、「手ごたえはない」「煩雑な作業ばかりが増えて、事態の本質をとらえきれない」などの声が教育現場から上がっている。

最近の研究によると、全米で導入されているいじめ撲滅プログラムのうち、有効なものは半数以下に過ぎない。いじめ行為減少に関し、ノルウェーで実績を上げ、鳴り物入りで取り入れられた「オルウェース」でさえも、米国では十分な成果は上げていない状況だ。

一方、子供の人格を育て、ゆがんだ「仲間文化」(ピア・カルチャー)ごと変えていこうという観点でいじめ問題に対応しようとしているのが、人格教育プログラムだ。「第4第5R研究センター」のトマス・リコーナー所長は、いじめ問題の元凶として、学生間での他者への尊重・尊敬の欠如を指摘。

リコーナー氏は、学校内での「冷酷で人間の尊厳を無視する」行動とは逆に、親切で他者を敬う考え方・行動を促す人格教育を取り入れたいじめ撲滅プロジェクトを提唱。学校をあげての人格教育プログラム実施と地域社会への奉仕などのサービス・ラーニングなどからなる十の方策と学級単位で実施する十のプロジェクトを紹介。子供たちの中にある徳性を高めることによっていじめ行為をなくす指針を示している。

いじめ問題について取り上げた「第4第5R研究センター」(トマス・リコーナー所長)のニューズレター

人格教育プログラムに根差したいじめ対策を実際に導入している学校もある。

地元メディアによると、テキサス州サンアントニオのジョンソン高校では、同級生をいじめていた新一年生の集団に、教師から相談を受けたアメリカンフットボール部の花形選手三人が同じ学生の立場で説得。最終的にいじめをやめさせた。同校は人格教育に力を入れている高校として知られており、いじめ撲滅にも力を注いでいた。

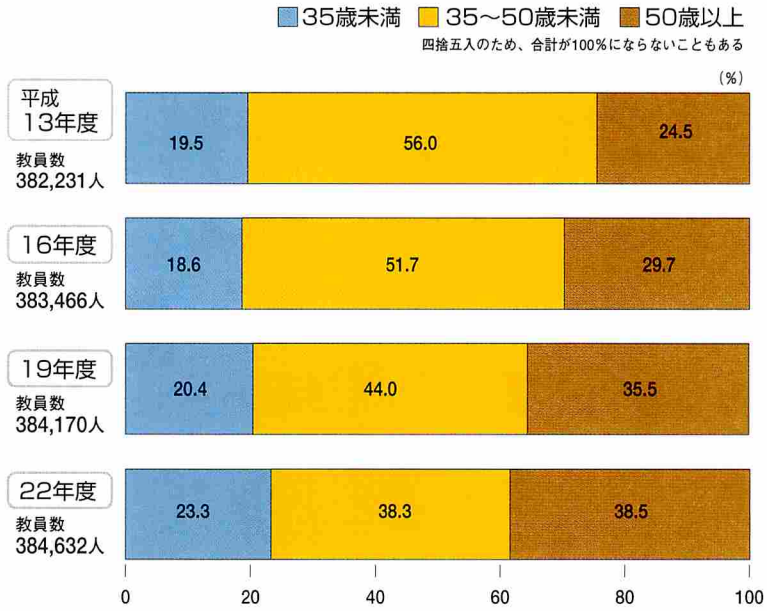
米国は歴史的に異なる人種や性差、信条・思想を乗り越えて、「一つの米国」を作ってきた。子供による原始的・排他的な「弱肉強食社会」の存在は将来、米国の理想を破壊しかねない。人格教育が将来の危機を救う可能性を示している。E

学校教員統計調査

小学校教員の約4割が50代以上

中堅層の減少で教育力低下の懸念

教員の年齢構成の推移（公立小学校）



文部科学省「学校教員統計調査」

教員の高齢化が一段と進み、年齢構成の急激な変化が教育現場に影響を与えている。文部科学省の「学校教員統計調査」によると、平成二十二年度の全国の公立学校教員の平均年齢は小学校四四・四歳、中学校四四・二歳、高校四五・八歳。前回（平成十九年度）をやや下回った小学校を除くと、中学・高校で過去最高となった。また女性教員の割合は小学校六一・九%、中学校が四一・一%でほぼ横ばい。高校では二八・六%と、女性の割合が上昇傾向にある。

もっとも高齢化が進んでいる小学校では中堅層（三十五歳から五十歳未満）が五六・〇%（平成十三年度）から三八・三%（同二十二年度）に激減。代わって五十代以上が二四・五%から三八・五%に増えた。

年齢構成の歪みは教育現場にさまざまな影響を与えている。若手を指導する中堅層が薄くなることで、教育力が低下するのではないかと懸念されている。またITを駆使した授業、英語授業や体育授業への対応など、教員層の高齢化がもたらす課題も多い。

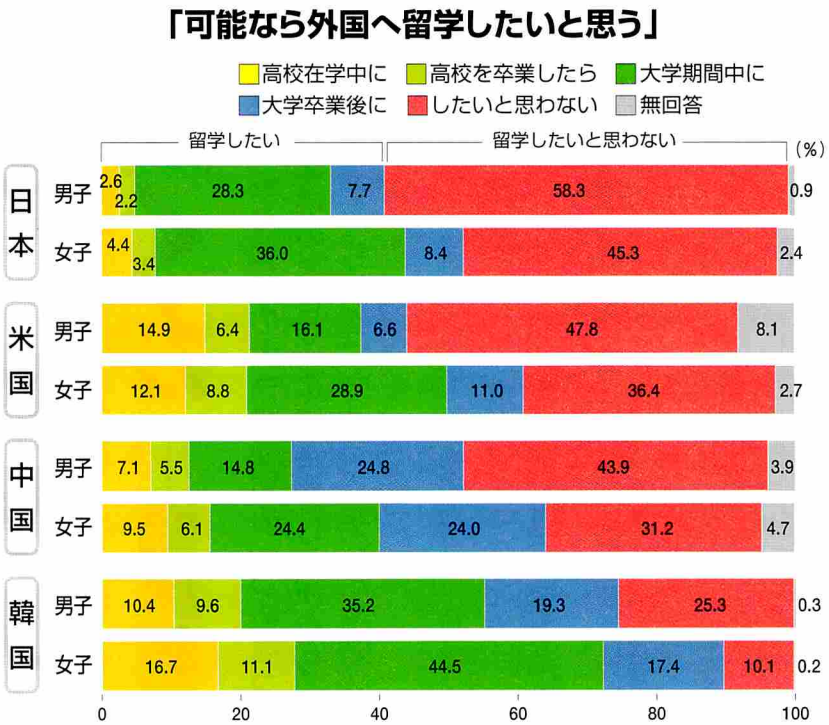
今後十年にわたって、団塊世代が大量に退職するため、すべての学校種で採用数を増やしている。一方、離職者の状況をみると、小学校では離職者の四割弱は定年以外の理由で離職しており、精神疾患など病気理由による離職が急増している。教員が置かれている学校現場の厳しさがうかがえる。

教員の質を高めようと、最近は大学院卒者の採用や民間からの採用も徐々に増えつつある。教員の学歴をみると、大学院卒者の割合がすべての学校種で上昇している。教職大学院が増えたことが大きい。

高校生の生活意識

「留学したい」は4カ国中最低

したくない理由「自国が暮らしやすい」「言葉の壁」



財団法人日本青少年研究所「高校生の生活意識と留学に関する調査」

日本の高校生の中で「留学したい」と考えているのは半数以下で、米国、中国、韓国に比べて低いことが、財団法人日本青少年研究所の調査で明らかになった。逆に「留学したくない」は最も高かった。

高校在学中から大学卒業後まで留学時期は別にしても、「可能なら留学したい」という日本の高校生は男子四三・四%、女子五二・二%。逆に「留学したいと思わない」は、男子五八・三%、女子四五・三%で、男女とも日本が最も高い。

留学したい理由を見ると、「語学力を身につけたい」「自分自身の視野を広げたいから」は約八割と高い。逆に「よりよい教育環境を求めたいから」「帰国後の就職が有利になるから」などは一割台で、他国との差が大きく、同研究所の報告書は「日本高校生の現状満足の意識の現れであろう」と分析している。

一方、留学したくない理由では、「自分の国のほうが暮らしやすいから」「言葉の壁があるから」「外国で一人で生活する自信がないから」が五割前後。さらに「面倒だから」も三八・五%で四カ国の中で最も高かった。

また、留学で最も重要な目的については、日本の高校生は「語学」が七〇・一%で、他国（二一～四割）と比較しても語学指向が強い。一方、「学位取得」は中国四三・三%、韓国二二・一%に対して、日本は三・七%だった。

この他、自己肯定感、自尊感情についての回答を見ると、日本の高校生は「物事に積極的」（六二・〇%）、「自分は価値ある人間」（三九・七%）、「自分はダメな人間」（八三・六%）など、自己肯定感が総じて低く、他国と大きな差があった。このところ日本の子供たちの自己肯定感が低いと言われているが、それを裏付けた形だ。

「中一ギャップ」をどう防ぐか
――臨床教育学の視点から

近年、学校教育の大きな課題の一つになっている「中一ギャップ」。環境の大きな変化に苦労しながらも「自分とは何か」を意識する子どもたちに向けて、学校と家庭は何ができるのか。

中一ギャップの定義

中一ギャップという言葉は、ここ数年、マスコミなどでも取り上げられるようになりました。中一ギャップをどう捉えるかということは、教育政策の中では小中の連携あるいは小中一貫教育と関係します。ただ、そう簡単に答えが出る問題ではありません。現在の日本の教育状況、社会状況全体の中で考えていく必要があります。

中一ギャップは一般的には次のように定義されています。

「小学校から中学校に進学するときに、学習内容や生活リズムの変化になじむことができず、いじめが増加したり不登校になったりする現象」。

臨床教育学の視点で言い換えると、次のようになります。

「生活や学びの環境が急激に変化することに伴い、一時的かつ集約的に子どもの不安やストレスが極度に高まり、その結果としてさまざまな問題（問いかけ）を孕むアクティング・アウト（子供たちの緊張や不安が高まって、自分の許容量を超えた時に様々な問題行動として現れる）として表現される現象」。例えば頭やおなかが痛くなったり、自分の心も体もどうしても動けない状況になってしまう。自分でも訳が分からない。そういう状況に陥る子どもたちも出てくるということです。

就学前から小学校に進む段階での現象を「小一プロブレム」、小学校から中学校に進む段階は「中一ギャップ」、中学校から高校に進む段階では「高一クライシス」と言われています。

不登校が3倍 学習面も影響

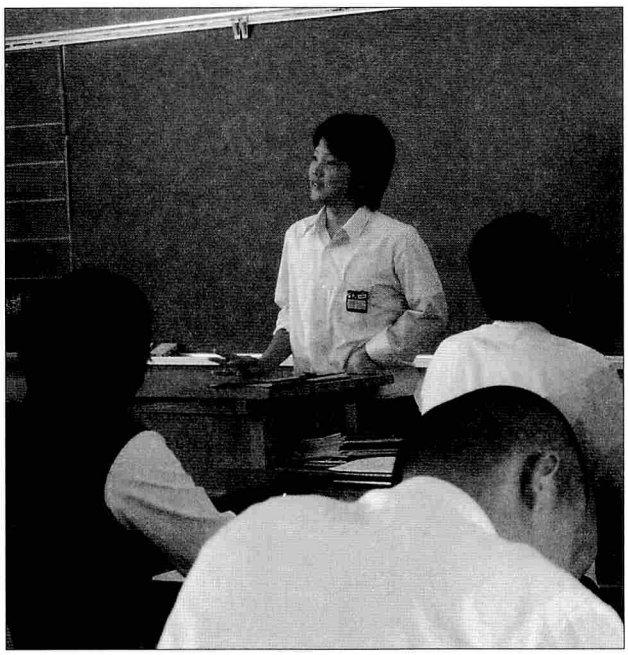
中一ギャップの問題で最も大きいのは、不登校です。小学校から中学校に進む段階で不登校が二・五～三・五倍に増えているのです。もちろん一人ひとりの状況は違いますから、全て中一ギャップが原因だと簡単には言えませんが、急増の一因だろうと考えられています。また、小学校から中学校に上がる時期には、いじめの増加や「学校がとても楽しい」という子が一〇％以上減少するなどの特徴が見られます。

庄井良信
しょうい・よしのぶ
北海道教育大学教授
1960年生まれ。広島大学大学院教育学研究科博士課程単位取得満期退学。ヘルシンキ大学教育学部在外研究員などを務める。現在、他に北海道臨床教育学会副会長。教育学博士。専門は臨床教育学。著書に『子どもの自立と授業の科学』『癒しと励ましの臨床教育学』『フィンランドに学ぶ教育と学力』（共著）。

ある子はこう言っていました。「小学校のときの『私』はどこに行ってしまったのか」と。小学校ではクラス委員もやって、皆の先頭に立って頑張っていた子が、中学校に入った途端、うまく馴染めない感覚に苦しんだというのです。

それと学習面も大きいですね。子どもや親から見ると、小学校と中学校の学習環境の違いを経験して、小学校ではスターのように活躍していた子が中学校では影を潜めてしまうことがあります。

中学に入って学校に馴染めなかったという体験を持つ子どもたちに聞き取りをしたところ、学びの環境が「良くも悪くも」激変してしまったと話す子が多くいました。例えば、小学校で重視されるのは子どもたちと対話しながら授業を進めるという形です。子どもたちが答えを間違えても「それは違う」と簡単に否定するのではなく、「どうしてそう考えたのかな」と受け取って、「皆で一緒に考えてみよう」と各々の考え方を引き出しながら進めていきます。



小学校から中学校に進み、環境の急激な変化に苦しむ子どもたちは、「自分とは何か」と考えさせられることが多い

それが中学校になると、どちらかと言うと一方的に、どんどん教えるような授業に変わります。一つの問題が分からなくて考え込んでいると、もう次の問題に移っているという経験をしている子が少なからずいます。

また子どもたちは、先生が本当に自分の人生を尊重しながら寄り添ってくれるような先生なのかを見ているというのです。良い時も悪い時も応援してくれる先生がいてくれたら、中学校にも自分の居場所が見つかるんだけど、と話してくれた子もいました。

「自分とは何か」と考えさせられる

さて、「ギャップ」という言葉には、二つの意味、側面があると考えられます。文部科学省が設置している、小中連携について議論する委員会でも、この両面の意見が出ていました。

一つは、中一ギャップは子供にとって新しいスタートのチャンスという意味があるのではないかという意見です。自分は小学校の時はこうだったけれど、中学校ではこうなりたいと。環境が変化することは、新しい自分にチャレンジするチャンスでもあるわけです。

もう一つは、環境の急激な変化で、自分の人生の連続性を失う側面があるということです。

私の父は転勤族で、私は五、六年ごとに転校していました。ですから私の思春期には一貫した「柱の傷」を刻むことは難しかったのです。そのせいもあってか、小学校から中学校に上がった時、学校に馴染めず苦しみました。自分の人生の連続性が断ち切られる感覚というのは、とても怖いものです。大人でもそうですが、アイデンティティーが揺らぎます。特に思春期というのは今までの自分をいったん解体し、再編していく時ですから、その時期の急激な変化は子どもにとって、二重三重の不安定さ

に直面することになります。

その中で、連続性が失われるという体験から、実は大切な問いが生まれていることが分かります。私も経験しましたが、思春期に連続性を失うと、かなり深く「自分とは何だろうか」と考えさせられます。そこを捉えていないと、子どもは大変なんだということに終始して何の解決にもなりません。

日記を書くことが自分を救った

私の場合、中一の時に東京から新潟に転校したのですが、東京の学校の国語の先生が日記帳を手渡して下さり、日記を書くことを勧めて下さいました。私は新しい土地、新しい学校で過ごす不安を書きつづりました。日記を書くことが自分を救ってくれたことに、後になって気付きました。

それから「自分に安心できる居場所があるのか」ということも大切です。この頃は、いわば青虫からさなぎになる時期です。外からは見えませんが、内側では蝶になるために劇的な変化が起こっています。この時期は、あの先生に話せば聞いてくれるだろうというように、心の居場所を探します。

また、「地域で自分を一貫して見守ってくれる人がいるかどうか」です。これは意外に感じるかもしれませんが、中学生に聞き取りをしてみると、自分が危機的な状況から脱することができたきっかけは地域で自分を見守り続けてくれた人がいたからということがあるのです。あそこのおじさん、おばさんが、自分が小さい頃から見守っていてくれた。自分は何か大きなものに見守られているという感覚ですね。実はそういう存在を求めてやまないのが、小学校から中学校への移行期なのです。

このように、この時期の子どもたちは、言葉には出さなくても、こうした人生の問いが最も強まる時期だと言えます。

別の見方をすれば、この時期というのは、これまでの自分に別れを告げて、自分を創り直していく時期です。このことを理解して、子どもたちのことを見直していく必要があるのではないかと思います。それは常に危機と隣り合わせ、分かれ道であると。ですから自分はどう生きるのかという子どもたちの心の声を聴く環境を、学校、家庭、地域で創っていく。そうした伴走者を、家庭や地域、学校でどのように保障していくかを考えないと、小学校から中学校へのカリキュラムを作っても、問題は解決しないのではないでしょうか。

学校や教師に出来ること

最後に、中一ギャップを防ぐために、学校や教師に出来ることは何かを考えてみましょう。

一つは生徒指導。具体的には生活指導、キャリアカウンセリングです。例えばフランスでは、キャリアカウンセリングの担当者が学年に一人はいるそうです。その人は子どもたちの人生全体をサポートする役割を持っています。子どもたちがどのように育ち、どのようなことにつまずき、何を目指して生きようとしているのか。常にそうしたことを見ている専門家が、これから日本の教育にも必要になるのではないでしょうか。

それから学習指導です。一気に変革していくということではなく、日々の授業の努力を重ねて、自分の心と体で考えて結論を導き出していく力、判断していく力を身につけさせていく。そのような糸口を見つけていく必要があるのではないかと思います。

そして、地域の様々な援助者、これは心理や福祉、医療の専門家なども含めてですが、連携を広げ、深めていくことです。先生や親が一人で抱え込んでしまうことがないように、子どもたちを守っていく環境を創っていく。その上で小学校と中学校の制度的なつながりはどうあるべきなのかを議論していくことが重要だと思います。E

北海道人格教育懇話会講演（二〇一二年二月二十一日）より

子育ては＊絵本で＊大丈夫（だいじょうぶ）

＊21

ほんとうの幸せってなんだろう？ 歌手として大成功したブタのお嬢さんが選んだ道　「しあわせなぶた」

浜島代志子
劇団天童／
天童芸術学校代表

「しあわせなぶた」パトリク・ルーカス／作　ほるぷ出版刊

大金持ちになったブタのお嬢さんは、プール付きのお城のような家に住みますが、幸せではありません。この場面のブタのお嬢さんの顔、「納得できないわ」という感じ。主役を取り絶頂にまで上り詰めたブタのお嬢さんですが、「誰もほんとうのわたしのことをわかってくれない。ほんもののブタのあたしのことは」と、見ず知らずの人につぶやくようになりました

さて、物語はどのように展開すると思われますか？　音楽など知らないオオカミと知り合い、ふっつりと姿を消します。オオカミに食べられたと思いますか？　いいえ、二人は結婚したのです。右側にブタ家、左側にオオカミがずらりと並んで披露宴、ですが、マスコミはシャットアウト。オオカミ夫とブタ妻は、ヒツジを飼いました。えっ、ヒツジを食べるためなの？　と思われるでしょうか。

いいえ、結婚以来、ブタのお嬢さんは日曜日だけ教会のコーラスで歌い、オオカミ夫とブタ妻は野原を仲良く手をつなぎ歩き、ヒツジが後ろからぞろぞろついてゆきます。ブタのお嬢さんは、ようやくほんとうの幸せをみつけました。めでたし、めでたし。

◇　◇　◇

ブタもオオカミも人間を表しています。仇敵の仲の二人が結婚するなんてすばらしいじゃありませんか。人は見かけによらぬもの、外的なことにとらわれず人の本質を真実の目でしっかり見なければなりませんね。

この絵本は、迷える大人に良いような気がします。子どもに読んであげながら、じんと胸に響きます。E

いなかに住んでいるブタのお嬢さんは、肉になって食べられるのがいやでプロの歌手になろうと決めてスカーフをかぶって町に行きます。レッスンを受け、またたく間にオペラの大スターになり、CDを出そうと言われるようになり、スター街道をまっしぐら。

燦然とした照明の中に立って歌うブタのお嬢さんはぶたそのもの、太ったオペラ歌手然としています。俳優もプロデューサーもマネジメント会社の人も全て人間です。私は舞台の人だからこの情景がよくわかります。

◇　◇　◇

滝沢馬琴（1767～1848）

失明しても書き続けた大作『八犬伝』

緑内障で失明するも、漢字を知らない嫁との二人三脚で大作を完成させた。

ジャーナリスト 池永達夫

74歳、緑内障で失明

江戸時代の文芸代表作である『南総里見八犬伝』は、室町時代後期を舞台に、安房国里見家の姫、伏姫と神犬八房の因縁によって誕生した八人の若武者（八犬士）が主人公として活躍する長編伝記小説だ。

著者の滝沢馬琴が『南総里見八犬伝』を書き始めたのが四十八歳の時だった。六十八歳のときには、老後の設計のために医者にした一人息子の宗伯が三十八歳で逝去。人生五十年と言われていた江戸時代のこと、六十八歳といえばほぼ鬼籍の年といってもいいほどの高齢だ。その老いらくの身の馬琴に妻だけでなく、先立たれた息子の嫁や孫の生計がずしりと重くのしかかった。

しかも馬琴はその前年、右目を失明していた。弱り目に祟り目とはこのことだったが、それでも左目一つでなんとか書き続け食いつないでいった。馬琴を描いた平岩弓枝の作品「へんこつ」にも、馬琴が夜の執筆活動で明かりの火が暗く感じるようになったとの表現がある。しかし、やがて七十四歳でついに残された左目も失明。高い金を払って水晶の眼鏡をつくったものの、全く役に立つことはなかった。

馬琴が目を酷使したことは想像に難くなく、夜更かしの傾向もあった。馬琴が失明した原因の病気は、緑内障だったと考えられる。

緑内障の端緒は、角膜や水晶体に栄養を送っている房水の流れが悪くなって、眼球全体の眼圧が高まることだ。そして、視神経乳頭が圧迫されると、視神経の血流が悪くなって次第に視神経が枯れてしまう。その結果、視神経の働きが損なわれ、視野が欠けてくるのが緑内障だ。進行し、放置しておくと失明するやっかいな病気だ。

時に痛みを伴うのが緑内障だが、曲亭馬琴日記には「痛みがある」との記述が残っている。老年で失明する代表的な病気に白内障や網膜剥離などがあるが、どちらも痛みを伴わないものだ。

漢字を教えながら口述筆記続ける

そしていよいよ「八犬伝」最後の大団円に取り掛かろうとしていたころには、わずかに昼と夜の区別がつく程度で、雨の日などは家の中でさえ方向が分からずまごまごするようなありさまだった。

馬琴がものを書き始めて五十年、この作品を完成させてこそ生涯をかけた人生の夢がかなうはずだった。だがその夢を実現する直前、完全失明という悪夢が待っていた。天国の入り口には地獄の奈落の淵があったのだ。

それでも馬琴は生業を続けるため、人に頼んで口述筆記を試みた

病を克服した偉人たち

滝沢馬琴肖像（『國文学名家肖像集』博美社より）

りした。だが、うまくいかず万事休すに見えた。

絶体絶命のその馬琴の苦境を救ったのが、実は嫁のお路だった。お路という名前は、嫁に来た時の名が隣家と同じで紛らわしいため、馬琴が付けたものだ。そのお路の名前どおり、本来ならどん詰まりになる馬琴の家の生業に路をつけることになったのだ。

そのお路に、学問があったわけではなかった。それどころか基本的な漢字すら書けないただの文盲だったのだ。ただお路とすれば、一人で立ち行かなくなった馬琴の杖となって手助けをしたいとの一心だった。

だから以後の馬琴とお路は、二人三脚で格闘しながらの執筆活動が続いた。お路も大変だが、漢字を教えながらの口述筆記は並大抵の苦労ではなかった。普通の口述筆記のように、ただ文章を頭でつづり言葉に出せばいいわけではなかったからだ。お路がつまづくたびに、いちいち漢字の偏や旁、また正確な仮名遣いを教えながら書き進めていかなければならなかった。

それは筋萎縮症にかかり体の自由がきかなくなったホーキング博士が、目で活字を追い文章をつづっていくような膨大なエネルギーを要した。

普通、盲目の人を手助けする人の苦労も大変なものだが、目が見えない馬琴が文盲のお路の手を借りて書くというのは、絶壁の山を登りつめていくような壮大な苦労の連続だった。

「作品を書き上げ人生の役果たした」

しかも、元々折り合いが悪い馬琴の妻がお路に嫉妬し、お路をなにかにつけていじめもした。そうした内外の苦労を重ねながら、天保十二（一八四一）年八月二十日、馬琴七十五歳の時、スペインの作家セルバンティスの「ドン・キホーテ」と並び称される『南総里見八犬伝』は完成した。二十八年の歳月をかけた全九十八巻、百六冊の大作だった。

馬琴はその後、七年近く漆喰を塗りつめたような暗闇の中に生き長らえ、一八四八年に死去した。八十二歳だった。家族が名医の診察を受けさせようとしたものの、「若い者がこれ以上余命を望むなら知らず、わたしにもう医者はいらない」と拒否した。

辞世の句は、「世の中のやくをのがれてもとのままかえすは天と土の人形」。

十分すぎるほどの生を受け、後世に残すべき作品も書き上げ人生のやく（役）を果たした以上、ただ無為にすごすことはなかろうとの意味だ。E

教育情報

千葉で人格教育協議会結成大会

「子供たちに誇れる文化を築いていこう」

三月十七日、千葉市民会館で「千葉人格教育協議会結成大会」(主催・同協議会準備委員会)が開催され、県議、市議、教育関係者、大学教授、父母など約三百名が参加した。

同協議会は、人格教育の推進、家庭と地域社会の再生を目指して、教師や地方議員、大学教授らを中心に、一昨年から準備会を重ね、この日の結成となった。

大会では、来賓の堀展賢・世界平和教授アカデミー事務総長が祝辞。「魂の成長を大切にして、知力、体力、気力をバランスよく成長させるのが人格教育。そのような人格教育を推進する会が発足するのは素晴らしいこと」「日本は太陽の国であり、龍の国、祈りの国、魂の国でもある。千葉から日本の未来を切り開いていこう」と述べた。

続いて、同協議会代表の原田敏行教諭が挨拶に立ち、「東日本大震災を通して、私たちは日本人としてどのように生きていくのか、家族とは何かを問われた。しかし、現在の日本は政治、経済、教育など、混迷を極めている。その中で今日、人格教育を推進しようという多くの人の思いがひとつになったことは大きな意義がある」「子供たちに生きる意味や価値を伝えていこう。この地にしっかりと根を下ろし、子供たちに誇れる文化を築いていこう」と訴えた。

千葉で行われた人格教育協議会の結成大会＝3月17日、千葉市民会館

二部では、野口芳宏・植草学園大学教授が「人格の教育　私の実践」と題して記念講演を行った。

野口教授はまず、中国、米国、日本の高校生を対象にした数年前の調査で、「先生や親に反抗するのは自由」という回答が三カ国の中で日本が突出して高かったことを示し、原因はどこにあるのかと問題提起。

そして、「学校の本質は教育、家庭の本質は養育、安らぎ、社会の本質は協力にある」とした上で、特に学校教育力の向上が必要だと指摘。「家庭はぜひ学校を応援してほしい」と述べた。

また、「昭和四十年代、落ちこぼれをなくそうと言われている。学力面ではそれは容易ではない。しかし道徳の落ちこぼれはなくせるし、なくさないといけない。だからこそ人格教育が大切」「教育基本法第一条は『教育は人格の完成を目指し』と謳っている。つまり、道徳の落ちこぼれをつくるなということだ。教育でこれほど大事なことはない。では子供を導く私たち教師や父母は人格を完成しているだろうか。人は何歳になっても人格の完成を目指す。そういう謙虚な心を持って歩んでいこう」と語った。

結婚と出産経験すると積極的子供観が大幅増

厚生労働省が三月二十一日に公表した「第九回二十一世紀成年者縦断調査」（二〇〇二年の時点で二十～三十四歳の男女に毎年継続して調査）によると、この八年間に結婚や出産を経験した人では、子供をもつことに対して「子供とのふれあいが楽しい」など、独身時代に比べて積極的な子供観の割合が、特に女性で増加している。

男性では、この八年間に結婚し子供が出来た人では、「子供とのふれあいが楽しい」が八年前（独身時代）より一九・六ポイント増。

女性の方は、結婚と出産を経験した人では「子育てを通じて自分の友人が増える」が二四・五ポイント増、「子どもとのふれあいが楽しい」が一七・五ポイント増、「家族との結びつきが深まる」が七・五ポイント増など、積極的な子供観が大幅に増加している。

結婚・出生の状況で子供観がどう変わったか（女性）

8年前との比較（第9回調査の数値－第1回の数値）

■ この8年間独身　■ 8年間のうちに結婚したが出産はない　□ 8年間のうちに結婚し出産も経験

子供ができて（できれば）

	この8年間独身	8年間のうちに結婚したが出産はない	8年間のうちに結婚し出産も経験
家族との結びつきが深まる	+0.9	+7.0	+9.0
子供とのふれあいが楽しい	−6.1	+3.3	+17.5
子育てを通じて友人が増える	+0.4	+3.1	+24.5
子育てを通じて人間的に成長できる	+3.5	+4.8	+5.2

-5　0　5　10　15　20　25

厚生労働省「第9回二十一世紀成年者縦断調査」

◇

三世代家庭、全世帯の7％

三世代家庭は減少を続けている。平成二十二年の国勢調査（結果は昨年公表）では、全世帯に占める割合が七・一％で、五年前の平成十七年より一・五ポイント低下。都道府県別に見ると、三世代の割合が最も高いのは山形県の二一・五％。ただ、二割を超えているのは山形のみだ。

もっとも、三世代家庭の効果は最近も指摘されている。学力面では福井県や秋田県の学力テスト好成績の要因の一つに三世代での同居があげられたほどだった。

出産においても、三世代家庭の割合が低い地域では出生率も低い傾向にあるという（平成十五年版厚生労働白書）。

品川区、千葉市、大阪・高石市など、三世代家庭への支援策を打ち出している自治体もある。

◇

「社会との結びつき大切だ」8割

内閣府の「社会意識に関する世論調査」（三月三十一日発表）によると、東日本大震災以降、社会との結びつきについて「前よりも大切だと思うようになった」という回答が七九・六％で、「特に変わらない」の一九・七％を大きく上回った。

調査は全国の成人一万人を対象に今年一～二月行われた。

震災後に強く意識するようになったこと（複数回答）でも、「家族や親戚とのつながりを大切に思う」が六七・二％で最も多かった。

なぜ日本の教育は間違うのか

森口朗著／扶桑社新書／七七七円（税込）

ゆとり教育やエリート教育、人権教育、そして教育現場に浸透する左翼思想などを取り上げている。著者は東京都の職員で、長年、教育現場に関わってきた。その経験から「日本を復興させる人材育成」の改革案を提示している。

印象的なのは、教育現場に流布している独善的な人権教育に対する厳しい批判だ。人権教育の根本的な間違いは、信仰心を枠外に置き、教育現場で宗教を排除してきたところにあると指摘。「現行の『道徳』の学習指導要領には、『宗教』という文字も『信仰』という文字も出てきません。次の指導要領改定の際の大きな課題として提起しておきたい」と語る。

エリート教育では、超平等社会で国民のモラルも比較的高い日本では、全ての国民に「指導者になった暁にはどう振舞えばいいか」を教えることが大切だと言う。

日本の教育復興のためには最も大きな障害になっている左翼思想を一掃すべきという主張には、著者の強い決意が伝わってくる。そして日本の教育が立ち直れるかどうかを示す試金石になるのが、大阪の教育改革だと語る。

◇

ルポ 子どもの無縁社会

石川結貴著／中公新書ラクレ／八一九円（税込）

孤立家庭の狭間で子供の命が危機に瀕している。本書はエスカレートする児童虐待の実態を通して、家庭崩壊がもたらす社会の闇を浮き彫りにしている。

子供が突然学校に来なくなり、地域から姿を消す。住民票もないまま、就学年齢になっても登校せず放置される。「居所不明児童生徒」と呼ばれる子供が年間千人以上存在するという。学校や行政からも見落とされてしまう、無縁社会の怖さを痛感する。

年間二百人が遺棄・置き去りにされる、現代の子棄ての実態は衝撃的だ。裸同然で山中やトイレに置き去られる子供、誰にも知られることなく「行旅死亡人」として葬られる子供の無縁死、赤ちゃんポストの実態など、子供の命が無造作に棄てられる現実に憤りを覚える。

なぜ、子棄てに至ってしまうのか。著者は親自身の未熟さ、さらに崩壊家庭と無縁社会の歪みが背景にある、他人事ではないと言う。子供を守れる家庭と社会の姿はどうあるべきか。重い課題を一人ひとりに突きつけている。

「魂の教育」とは何か

人格教育では、子供たちが教師や父母など模範となる人の人格に触れて良い影響を受けることが大切です。また、「人格」の語源には「魂に刻まれたもの」という意味があります。「魂の教育」は人格の核心とも言える魂の無限の可能性に気づき、その魂を強めていくこと、あるいは子供たちが自己の内面の価値に目覚めて人格の形成をなすことだと考えます。例えば、「大自然に大いなるものの存在を感じる」と言いますが、そうした無限の価値、意識のようなものを自分自身の中に見出すことだと言うこともできるでしょう。

■表紙写真　福島・猪苗代湖　　撮影・大塚克己

絆の力を示す家庭となろう

東日本大震災から一年が経ちました。被災者のみなさんはこれから復興まで遠く険しい道を歩まなければなりませんが、震災後の過酷な状況を乗り切った強い精神力を持つ東北の人たちですから、きっとその困難を克服してくれるでしょう。

震災後の日本に、顕著な変化が見られます。それは人との絆の大切さに目覚めたことです。未曽有の自然災害に直面した時、頼りになるのは家族や地域における人間関係だということに気がついたのです。

近い将来、日本の至る所で大きな地震が起きると予想されています。いざという時に助け合うことができる人間関係を常日頃から築くことが大切だと指摘されていますが、それも東北の人たちがお手本を示してくれたからです。

しかし、絆の再生はまだ途についたばかりで、現実には孤独な人が多いのです。それを端的に示しているのが自殺の多さです。昨年一年間の自殺者は三万六百五十一人を数えました。前年よりも千人あまり減りましたが、三万人を超えたのは十四年連続です。悲しいことですが、これが現実の日本の姿です。

経済的な理由で自ら命を絶つ人が少なくありませんが、どんな困難も家族や周囲の人々との強い絆があれば、希望を失わずに立ち向かうことができるはず。自殺者が多いということは、支援の手をさしのべていない私たちの問題でもあります。

肉親の生命や、生活手段を奪われた人が多かったにもかかわらず、パニックを起こさずに規律ある行動をとった東北の人たちには、世界中から賞賛が寄せられました。それも家族や地域の人々と強く結ばれた絆があったからです。

誰かとの絆が支えとなって、わき出てくるのが生きる力や希望です。その原点は家族との絆。それが社会、国家、世界へと広がって、世界平和は実現するのです。ですから、世界平和は家庭の中から生まれると言っても過言ではありません。私たちの家庭が日本の絆再生の先頭に立ち、世界平和の礎となりましょう。

毎月第3日曜日は「家庭の日」
11月第3日曜日は「家族の日」

「家庭の日」は、社団法人「青少年育成国民会議」が進めてきた「家庭の日」運動に端を発し、今ではほとんどの自治体が、第三日曜日を「家庭の日」に定めています。さらに政府は十一月の第三日曜日を「家族の日」、その前後一週間は「家庭の週間」として定めました。この日を機会に、家族の強い絆を確認できれば、それは家族みんなへの素敵なプレゼントになるでしょう。

家庭は愛の学校

真の家庭運動推進協議会

The Association for the Promotion of True Families

〒160-0022 東京都新宿区新宿5-13-2 成約ビル4F
電話03(6457)7760 FAX03(6457)7761 http://www.aptf.gr.jp

●皆様の御意見や気づいたことをお寄せ下さい。 教育問題に関して、皆様の身の回りでの様々な出来事や御意見などを真の家庭運動推進協議会本部までお寄せ下さい。お寄せいただいたものを参考にしながら、皆様と共によりよい教育環境や家庭づくりに取り組んでいきたいと考えています。

圓一
第3種郵便物認可
2012年5月10日発行
毎月10日発行・通巻264号

歴史と伝統の探訪

沖縄学の父、日琉同祖論唱える／沖縄

（左上より時計回りに）伊波普猷（『「沖縄学」の父伊波普猷』清水書院）、顕彰碑、浦添城址にある墓

「彼ほど沖縄を識った人はいない
彼ほど沖縄を愛した人はいない
彼ほど沖縄を憂えた人はいない
彼は識ったが為に愛し愛したために憂えた　彼は学者であり愛郷者であり予言者でもあった」

顕彰碑に刻まれたこの言葉が「沖縄学の父」と呼ばれる伊波普猷を物語っている。

廃藩置県により沖縄県が設置される三年前、一八七六年、伊波は琉球藩那覇西村（現那覇市西）に出生。沖縄県尋常中学校（現首里高校）に入学するも校長排斥運動に加担したとして退学処分となる。

後、三高を経て東京帝国大学入学、言語学を専攻。学友に金田一京助らがいる。卒業後帰郷、県立図書館館長を務める傍ら、言語学、民俗学、歴史学、宗教学等広範な資料の収集・研究を通して沖縄独自の歴史・文化を解明していく。

一方、沖縄組合教会を設立し、聖書やエスペラント講習会での指導にも当たる。日琉同祖論者（日本人と琉球人は起源としては民族的に同一であるとする説）としても知られるが、近年の遺伝子学で解明された沖縄人と日本人が人種的に同祖であることを言語や民俗の研究から百年前に証明してみせた。研究成果を基に、政府による行政差別を毅然と批判しつつ、出自に悩む沖縄県民に日本人としての自信と誇りを持ち生きよと啓蒙活動に心血を注いだ。その後、上京し、民俗学者の柳田國男や折口信夫らと親交を深め、多くの優れた論文・著作を残す。

一九四五年の沖縄玉砕・終戦による絶望から再起、沖縄の救民運動に奔走するも、四七年、沖縄の将来を憂いつつ、東京で波瀾の生涯を閉じた。享年七十一歳。E

2012
5
no.264
En-ichi
●発行所
NCU-NEWS
（東西南北統一運動国民連合）
〒160-0022
東京都新宿区新宿5-13-2
成約ビル２Ｆ
TEL.03(5362)0631
FAX.03(3354)5017
E-mail news@en-ichi.org
URL http://www.en-ichi.org
●発行人　渡辺久義
京都大学名誉教授
定価 400円
[1年間5000円(送料込み)]
郵便振替番号
00160-3-667291
●本誌に対するご意見、ご感想をお寄せください。
●定期購読のお申し込みは、電話またはEメールでどうぞ。